

Scheibler と Grohman

——発展期ポーランド王国繊維工業の企業家像——

藤 井 和 夫

I

本稿は、以前に発表したポーランド王国繊維工業成立期の企業家に関する研究を受けて、その繊維工業発展期(1864—1914年)における企業家像を明らかにしようとするものである。もとよりその全体像を明らかにしようとするものではなく、限られた企業家および企業についての断片的なスケッチでしかないが、それでもポーランド王国繊維工業の発展を新たな角度から捉え直す上で一定の意義をもつものと考えている。そのことについて少し説明してみたい。

18世紀のイギリスに始まる工業化の波は、各国に大きなインパクトを与えながらまたたく間に世界中に広がっていった。近代経済社会の画期をなすこの歴史的過程は、各国・各地域のもつ歴史的多様性に応じて様々に異なったレスポンスを呼び起こすことになるが、一方で世界を総体としてみれば、各国・各民族は敵対的・競争的対立関係を孕みつつも大きな相互的依存関係(ただし新しい従属的關係をも含めて)の網の目の中に結ばれることになったのである。従って、すべての国家や民族は、たとえこれまでその歴史の歩みを全く別にしていたとしても、今やこの世界をひとつとする巨大な歴史的過程の中に自らの運命をゆだねる以外にとるべき道は残されていなかった。つまり、各国・各民族の置かれた政治的・経済的・文化的・社会的諸条件の相違が、それぞれの地域におけ

1) 拙稿「成立期ポーランド王国繊維工業の企業家像」、『関西学院大学経済学論究』, 37巻3号, 昭和58年12月.

Scheibler と Grohman

る工業化のあり方を極めて多様なものにしていたにもかかわらず、そこには後に述べるような意味でひとつの必然的な歴史的過程としての共通性・普遍性あるいは一体性が見出せるのである。

さて、19世紀のポーランドにおいては、近隣列強の分割併合による民族国家の消滅という極めて特殊な政治的環境の下に、この工業化が進行した。従ってその工業化過程は、当初から著しく特殊性を有したものにならざるを得ない。そこで、その時期以後今日までのポーランドの経済的後進性・停滞性という問題をも背景としながら、ポーランドにおける工業化の特異性——遅れ、ゆがみ、不徹底性、脆弱性あるいは他方での部分的な急激性等——という問題が研究者の研究課題となってきた。あるいは、少なくとも近代ポーランド経済史の研究にとって、その分析視角を構成する重要な認識上の前提条件のひとつとなっているのである。

ポーランドの工業化における特殊性を強調する先駆的な例は、ポーランド経済史家達の言うかつてのいわゆる「ドイツ・ブルジョア史学」に見られる“植民地的なポーランド資本主義の発展”という説や、“ポーランド資本主義の人工的あるいは接ぎ木的性格”を主張する見解である¹⁾。そこでは、ポーランドの資本主義が国内市場ではなくその支配国であるロシアの市場にもっぱら依存する形で発展したことと、その発展の中核たる繊維工業の担い手がポーランド人ではなくほとんどドイツ系の企業家によって占められていたことが特に強調されることになる。しかしこれらの見解に対しては、特にポーランド人経済史家の側からその見解のもつ“反民族性”をめぐってその後多くの批判が加えられ、今日ではもはやそのままの形で再説されることはほとんどない。

このいわゆる「ドイツ・ブルジョア史学」的な見解に対する批判は、一方でロシア市場(=東方市場)の相対的な地位を低下させるポーランドの国内市場の再評価という形をとり、他方でドイツ人企業家および外国資本一般の役割を軽視しようとする傾向をもっていると言えるであろう。そしてポーランドにお

1) W. Kula, *Kształtowanie się kapitalizmu w Polsce*, Warszawa 1955, s. 12—16.

ける工業化の特殊性は、そうした外国依存的な性格の中にではなく、イギリスを典型とする自立的な国民経済の発展における遅れあるいは弱さという点にそれを見出そうとしているように思われる。

しかしながら、さきの植民的地的なポーランド工業化観が今日のわれわれにとってもはやほとんど説得力を失っているのと同様に、それに対するポーランド経済史家の側からの批判・反論、すなわちポーランドにおける工業化の諸問題を後進資本主義国に一般的な問題という脈絡の中で把握しようとする見方もまたいささか説得力に欠けるものと言わざるを得ない。なぜなら、19世紀のポーランドの主要産業たる繊維工業にとってロシア市場の果たした役割の重要性はなお否定できないし、一方で国内市場の意義はまだ十分に実証されつくしてはいない。そして、当時の繊維工業の中心地であるウッジの重立った企業家の中に、ひとりとして純粋なポーランド人の姿を見つけ出すことができないのも、これまた動かしがたい事実なのである。加えて、19世紀のポーランドを後進資本主義国として捉え、もっぱらそのモデルとなる先進国と比較した“後進性”を析出する努力の中からは、例えば企業家について、「ポーランドにおいては他の諸国、特に西ヨーロッパの諸国とは異なり、この時期（=19世紀と両大戦間期）にドイツの文献に“Unternehmer”と表現されるような工業企業家のタイプが広範に形成されるということ¹⁾はなかった」し、結局ポーランドのブルジョア階級は、「西ヨーロッパのブルジョアジーと比較してみると、その役割および意義という点ではるかに掛け離れたものでしかなかった²⁾」という結論以外²⁾は出てくるはずがないのである。

つまりイギリスやあるいはドイツ・フランスといった先進工業諸国の事例を基準として他の国々の工業化を計測すれば、そこには追いつくことのできない遅れや、埋めることのできない格差ばかりが強調されることになり、ひいてはポーランドのような東ヨーロッパ諸国での工業化など将来への課題という意味

1) R. Kołodziejczyk, *Burżuazja polska w XIX i XX wieku*, Warszawa 1979, s. 156.

2) *Ibid.*, s. 157.

Scheibler と Grohman

以外はもたないことにもなってしまう。しかし19世紀後半のポーランド、特にその中心部分たるポーランド王国において、半世紀の間に繊維工業の生産額で30倍の成長が見られ、それがロシア帝国の繊維工業の中でもかなり重要な地位を占めていたこと、そしてその背景に1870・80年代の目覚ましい技術革新と工場制大企業への生産の集中があったことも事実であり、それに対して我々はポーランド王国における工業化の成果として一定の評価を与えなければならないであろう。

すなわち、19世紀のポーランド(より正確にはポーランド王国)を後進資本主義国として把えるのは当然であるとしても、後進国はその置かれた歴史的条件の相違から決して先進国の工業化と同一の過程を辿ることはなく、それぞれの国が置かれた具体的な政治的・経済的・文化的・社会的諸条件に応じて様々な工業化のヴァリエーションを生み出すことに留意すべきである。当時のポーランドにおける経済発展の成果が、イギリス等の西欧先進諸国のそれと比べていかに小さなものであろうとも(国民経済全体としてはともかく、繊維工業に限って言えば、それは相対的にそれほど小さなものではない)、あるいは経済発展を支えた市場と企業家とが一見していかに外国に依存したものに見えようとも、それがまさにポーランドの工業化なのであり、様々な点で不利な条件の下にあってあれだけの経済的な成果を成し遂げたポーランド経済の実像なのである。先に述べた工業化過程の普遍性や共通性は、イギリスを物差しとして後進国の工業化にあてはめてみるという意味ではなく、先進国と後進国との歴史的な相関関係や、このような後進国における工業化の多様性をも視野に入れて考えられるべきものであろう。ポーランド王国の企業家についても、そのような視点に立って分析がなされなければならない。

確かに当時のポーランドにあっては、政治も経済もあらゆるものが民族独立の回復という文脈の中でそれぞれの位置づけ、意義が問われるという側面があ

1) 拙稿「19世紀後半におけるポーランド王国繊維工業の発展」、『関西学院大学経済学論究』、39巻3号、昭和60年10月参照。

った。その後のポーランドの歴史の中でも民族独立の回復とその保証が常に第一義的な国民的課題であったのは確かである。しかしだからと言って、「市場こそブルジョアジーにとって民族的裏切りの最初の学校である」とし、ポーランド分割によるロシア市場の確保に自らの利益を見出していた繊維企業家達の“非民族性”あるいは“反民族性”を問題としてもっぱらその観点のみから企業家を証価したり¹⁾、後述するようにウッジの繊維企業家の特殊性を主張して、19世紀のポーランドの企業家(=ブルジョア)の中で例外扱いにしようとするのは、ポーランドにおける工業化の実態を把握する上でかえって本質を見失わせることになるであろう。

本稿のねらいは、少しくそうした立場を離れてウッジの繊維企業家像を把握、19世紀のポーランド王国における工業化(=資本主義工業の発展)のひとつの要因に迫ろうとするものである。対象となるのはポーランド王国繊維工業の発展期を代表する2名の企業家、Scheibler と Grohman であるが、その前にウッジの繊維企業家全般についてももう少し触れておこう。

II

ポーランドのブルジョアジーについて精力的に研究を続けている R. Kołodziejczyk は、前述のように、結局ポーランドにおいて真の意味での企業家階層が形成されることはなかったと結論づけ、そのために今日西欧資本主義諸国であれほど注目を集めている「企業家史」(Unternehmergeschichte)も、ポーランドにおいてはほとんど大きな反響を呼び起こすことはなかったと述べている²⁾。そして、ノーベル賞作家 Reymont の原作に基づいて、極めてエネルギッシュなウッジの繊維企業家像を描いてみせたアンジェイ・ワイダ監督の映画

1) Kula, *op. cit.*, s. 106—110.

2) Kołodziejczyk, *op. cit.*, s. 156—157.

Scheibler と Grohman

「約束の土地」(“Ziemia obiecana” 1975年)¹⁾を評して、芸術家達はウッジのブルジョアジーの真の像を把えきってはならず、わずかにそこに描かれたドイツ系のウッジの企業家達(“Lodzermensche”)の貪欲で残酷な姿が、いわゆる企業家達のイメージをいささか思い起こさせるにすぎないと批判する。²⁾つまりウッジのブルジョアジーについて、その企業家あるいは経営者としての活動には極めて低い評価しか与えていないのである。

Kołodziejczyk によれば、全体としてポーランドのブルジョアジーは全く未熟であって、例えば企業経営によって生計を営む者は、その家族を含めて1927年に56万5千人存在したが、それは全人口のわずか2%にしかすぎず、しかもその中で商業に従事する者が工業に従事する者を数の上ではるかに凌駕していたし、何よりも独立を回復した第1次大戦後になってむしろ外国資本の導入が急増したことこそ、ポーランド・ブルジョアジーの弱体を露呈するものに他ならない。³⁾結局ポーランドはその歴史上、自身の強力な「市民」階層を持つことはなかったし、長期間の分割占領の影響もあって、民族の独立回復後もブルジョアジーは発育不全のままだったのである。⁴⁾

このようにポーランドのブルジョアジーを理解する Kołodziejczyk は、Kronenberg や Steinkeller をはじめとして商業や金融を中心に活動するワルシャワの企業家達の中に本来のポーランド・ブルジョアジーの姿を求め、彼自身そこで最も活発に工業への投資が行われていることを認めつつも、⁵⁾ウッジにおける企業家達はその民族構成の特異性と蜂起や革命期における反ポーランド民族性のゆえにポーランドを代表する企業家達とは見なされていないのである。

確かに当時ポーランド王国全体で5%程度しかないドイツ系住民の割合が、

- 1) その中で本稿で取り上げる K. W. Scheibler や I. K. Poznański をモデルとした人物が重要な役割を演じている。ただし映画の方は人物の描き方に関して、Reymont の同名の原作小説に必ずしも忠実ではない。なお原作の執筆時期は1896—98年である。
- 2) Kołodziejczyk, *op. cit.*, s. 157.
- 3) *Ibid.*, s. 157.
- 4) *Ibid.*, s. 7—9.
- 5) *Ibid.*, s. 127.

ウッジ市においては41.4% (1860年) という割合にまで達し¹⁾、熟練労働者については18.2% (1864年、ただしチェコ出身者を含めると33.3%)²⁾、繊維企業家については48.3% (1866年、第1表参照)、45.8% (1870年、第2表参照)あるいは37.2% (1890年、第2表参照)に達したという事実は、ポーランド王国社会の中でウッジという工業都市のもつ異質性を示してはいるが、それは決してウッジの企業家達の存在を例外として扱うことを要求するものではない。むしろそのような特殊な企業家のあり方こそが、ウッジをひとつの核とするポーランド王国の工業化の特質を端的に物語り、その目覚ましい成果の秘密を解く鍵を我々に提供してくれるものなのである。

以前にも触れたことがあるが、あらゆる国において、そして特に前提となる諸条件に恵まれず将来の見通しの立ちにくい後進国においてこそ、困難な状況

第1表 ウッジ市繊維企業家の民族構成(1866年)

	雇 用 数				計 (%)
	5~15	16~50	51~100	101~	
ポーランド人	40	8	1	0	49(13.0)
ドイツ人	143	34	4	1	182(48.3)
ユダヤ人	51	22	2	0	75(19.9)
チェコ人	46	8	2	0	56(14.9)
他	12	2	1	0	15(4.0)
計	292	74	10	1	377(100)

出所：A. Słoniowa, Problemy liczebności, narodowości i wewnętrznego zróżnicowania burżuazji łódzkiej w drugiej połowie XIX w., [w:] Dzieje burżuazji w Polsce, t. III, Wrocław 1983, s. 131 による。

- 1) 拙稿「19世紀ポーランド王国の資本主義工業」、『関西学院大学経済学論究』, 34巻3号, 昭和55年10月, 47頁。
- 2) 拙稿「ポーランド王国における繊維工業の成立」、『関西学院大学経済学研究』, 9号, 昭和51年11月, 71頁。
- 3) 拙稿 'Przemysłowcy włókiennicy okręgu łódzkiego w okresie powstawania kapitalizmu Królestwa Polskiego', "Kwansei Gakuin University Annual Studies", Vol. XXX, 1981年, s. 165-166.

Scheibler と Grohman

第2表 ウッジ市繊維企業家の民族構成（上段 1870—1880年，下段 1890—1900年）

人

	雇 用 数					計 (%)	
	5~15	16~50	51~100	101~500	501~	A	B
ポーランド人	5	3	0	0	0	8(2.0)	43(10.8)
ドイツ人	57	29	12	10	3	111(27.8)	183(45.8)
ユダヤ人	47	21	9	6	1	85(21.3)	129(32.3)
他	6	3	3	0	1	13(3.3)	13(3.3)
不明	121	47	12	4	0	184(46.0)	32(8.0)
計	236	103	36	20	5	400(100)	400(100)
ポーランド人	10	5	1	2	0	18(2.9)	66(10.5)
ドイツ人	38	47	27	26	6	144(23.0)	233(37.2)
ユダヤ人	83	61	22	15	4	185(29.5)	274(43.7)
他	9	8	4	4	2	27(4.3)	27(4.3)
不明	116	78	37	20	2	253(40.4)	27(4.3)
計	256	199	91	67	14	627(100)	627(100)

出所：Stoniowa, *op. cit.*, s. 132-133 による。

なお合計のA欄は民族に関して極めて明確な証拠のある者の数を示し，B欄はその民族不明者について出身地や氏名等からできる限り民族を推定して得られた数字を示す。

に敢然と立ち向かい未知の経済的活動分野に積極的に乗り出す革新者としての企業家の存在が工業化にとって不可欠となる。ポーランド王国の場合そうした企業家は、商業や高利貸的な銀行や一部の工業に幅広く手を染めながら政府から特権的な塩やタバコの専売権を手に入れてそれによって巨万の富を手に入れたワルシャワの企業家よりも、次第に繊維工業へ経済活動の場を限定してゆきながら活発な投資活動を行い純粋な産業資本家としての成長を遂げたウッジの企業家の中にこそ求められるべきものなのではなかろうか。その意味で、むしろウッジの企業家こそ典型的なポーランド王国の企業家と見なされるべきであろう。言うなれば、ウッジの繊維企業家が異色なのではなくて、ポーランドの工業化そのものが異色なのである。その中で、ウッジの企業家達は工業化にとってむしろオーソドックスな役割を果たしたと言うべきであろう。その点につい

ては後にもう一度触れることにして、次に我々は Scheibler を例に、繊維工業発展期における具体的な企業家の活動について見てゆくことにしよう。

III

Karol Scheibler は1820年にザクセンに生まれ、その後ヨーロッパ各国で繊維工業における最先端の技術と工場経営に関する豊富な経験を身につけた後、1848年にポーランドに移り住み、1855年にウッジ市長との契約に基づいて40馬力の高速蒸気機関を動力とする18,000錘（当初は5,740錘）の紡績機を装備した最新式綿紡績工場を設立した¹⁾。綿紡績業は一般に最も機械設備を導入しやすく、またその必要性の高い産業部門であったから、ポーランド王国の繊維工業もまず羊毛工業を中心として成立した後に、この部門を中心に機械化を進め本格的な発展期を迎える。Scheibler はその機械制綿工業の先駆けおよび中核の役割を担ったのである。

もっともウッジの綿工業時代の幕は既に1820年代の後半に Krystian Fryderyk Wendisch のマニュファクチュアによって切って落とされ、1830年代から40年代にかけて Ludwik Geyer の機械制綿紡績・織物工場によって本格化されていた²⁾。また Karol Steinert の綿染色・捺染工場（1834年設立）、後述の Traugott Grohman の綿紡績・織物工場（1844年設立）、Dawid Lande の綿紡績工場（1845年設立）、Karol Moes の綿紡績工場（1845年設立）等も既に存在していたから、Scheibler の綿工場設立は決して早い方ではない。ただその規模と近代性において当初から際立っており、1860年には生産額において Geyer (453,200 ルーブル)³⁾ に次ぐ地位を占めていた (305,160ルーブル)⁴⁾。

1) 前掲拙稿「成立期ポーランド王国繊維工業の企業家像」、89—90頁。

2) 同上拙稿、80—85頁。

3) K. Bajer, *Przemysł włókienniczy na ziemiach polskich*, Łódź 1958, s. 101.

4) W. Puś, S. Pytlas, *Dzieje Łódzkich Zakładów Przemysłu Bawełnianego im. Obrońców Pokoju „Uniontex“ (d. Zjednoczonych Zakładów K. Scheiblera i L. Grohmana) w latach 1827—1977*, Warszawa 1979, s. 42.

Scheibler と Grohman

ところで、1850年代半ばには主要な企業家もほとんど顔を揃え、生産額もポーランド王国全体で1854年の273万ルーブルから1860年の809万1千ルーブル¹⁾、ウッジで同じく1854年の145万8千ルーブル（王国全体の53.4%）から1860年の371万9千ルーブル（王国全体の46.0%）²⁾へと6年間で2.6～3倍の増加を示して順調な発展を遂げるかに見えた綿工業であったが、その行手には思わぬ障害が待ち受けていた。1861年に始まったアメリカ南北戦争の影響によるヨーロッパの「棉花飢饉」がそれである。

当時ポーランド王国で用いられる棉花は直接アメリカから輸入されるのではなく、イギリスやプロイセン経由で購入されたから、この棉花不足の影響はイギリス等と比べて多少は軽いものであったが、それでも原料危機のピークの1863—64年には棉花価格は1861年と比べて5倍にはね上った⁴⁾。当然綿工業は大打撃を受け、ポーランド王国全体の生産額は綿製品価格の急騰にもかかわらず1863年に262万9千ルーブル（1860年の32.5%）にまで落ちこみ⁵⁾、ウッジでは同じく1861年から63年に380万ルーブルから73万ルーブルへと5分の1に減少した⁶⁾。

この不況によって最も深刻な影響を受けたのは家内工業を含む中小の綿織物生産者で、1861年に1,400名であった綿織工の失業者は⁷⁾、1862年の12月には3,500名となり、翌年には5,000名にも達した⁸⁾。かくて1860年から65年の間に、中小の綿織物生産者の半数が一掃されたと言われている⁹⁾。一方で先に名を挙げ

1) 前掲拙稿「19世紀後半におけるポーランド王国繊維工業の発展」、87頁。

2) J. Łukasiewicz, *Przezwrot techniczny w przemyśle Królestwa Polskiego 1852—1886*, Warszawa 1963, s. 105.

3) A. Bocheński, *Wędrówki po dziejach przemysłu polskiego, Cz. II*, Warszawa 1969, s. 131.

4) Bajer, *op. cit.*, s. 105. もちろん原料棉花価格の上昇に伴って綿製品の価格も急騰し、1863年から64年の1年間だけでその価格は2倍に上昇した。

5) 同上拙稿, 87頁。生産額が1860年の水準に回復するのは1867年である。

6) Łukasiewicz, *op. cit.*, s. 110.

7) Bocheński, *op. cit.*, s. 131.

8) Bajer, *op. cit.*, s. 105.

9) Puś, Pytlas, *op. cit.*, s. 43.

た主要な企業家達の工場も軒並に操業停止 (L. Geyer, S. Lande, F. Moes)¹⁾ が生産の縮小 (T. Grohman 50%, K. Steinert 90% それぞれ減少)²⁾ を余儀なくされた。

ところがこの深刻な不況の時期に、唯一 Scheibler の工場のみは何ら影響を受けることなくフル操業を重ね、綿製品価格上昇のおかげで莫大な利益を獲得した³⁾。その売上げ高は1861—64年の間に363万7千ズウォティに達している⁴⁾。

Scheibler にそれが可能であったのは、他の企業家達と違って彼がヨーロッパ各地の繊維企業に関与したり、イギリスで直接繊維機械製造技術を習得したり、ウィーンでイギリス商社の大陸における代表者として活躍し、あるいはポーランドに移ってからも紡績工場の支配人を勤めたり、ウッジで商社を経営したりというように、最新の技術情報についても、繊維企業の経営ノウ・ハウについても、また国際的な商取引の実務についても極めて豊富な経験と交友関係を有していたからであり⁵⁾、その点が例えば Geyer や Grohman のような叩き上げの、あるいは成り上がりの企業家と根本的に異なるところであった⁶⁾。この不況を、棉花輸入の抑制と原料の在庫調整によって順調に乗り切った Scheibler は、もはや Geyer の工場をも抜いて、綿工業ではポーランド王国に並ぶ者もない巨大企業に成長していた⁷⁾。

第3表の生産額の推移が、Scheibler の企業の成長ぶりを端的に物語っている。1860年の生産額を100とすれば、1870年 607, 1879年 2,364, 1892年 2,721, 1900年 4,196, 1913年 4,229と生産の拡大は続き、半世紀の間に40倍以上の企業成長を遂げたことになる。その間ポーランド王国全体では、繊維工業全体で26.4倍、綿工業で16.4倍の成長が見られた⁸⁾。それではポーランド王国の中で

1) Łukasiewicz, *op. cit.*, s. 110.

2) Bocheński, *op. cit.*, s. 131.

3) *Ibid.*, s. 131.

4) Puś, Pytlas, *op. cit.*, s. 43.

5) 前掲拙稿「成立期ポーランド王国繊維工業の企業家像」, 89—91頁.

6) Bocheński, *op. cit.*, s. 132—133.

7) Puś, Pytlas, *op. cit.*, s. 43.

8) 前掲拙稿「19世紀後半におけるポーランド王国繊維工業の発展」, 78, 87頁による。ただし物価の変動は考慮されていない。

Scheibler と Grohman

第3表 Scheibler の生産額 (ルーブル)

年	生産額	年	生産額
1860	305,160	1882	9,381,919
1866	569,000	1885	8,327,496
1867	738,000	1888	10,167,518
1869	1,061,400	1892	8,302,611
1870	1,850,800	1893	9,312,215
1871	2,198,500	1899	11,272,184
1875	2,423,500	1900	12,803,697
1876	2,493,500	1904	11,697,870
1877	3,800,000	1905	10,827,089
1878	6,713,500	1908	15,659,203
1879	7,214,000	1911	16,135,846
1881	7,851,434	1913	12,906,484

出所：Puś, Pytlas, *op. cit.*, s. 43, 98.

第4表 Scheibler の生産額の割合 (%)

年	王国繊維工業のうち	王国綿工業のうち
1860	2.2	3.8
1870	12.0	18.1
1879	12.7	22.3
1892	7.7	14.5
1900	7.0	16.2
1913	3.6	9.8

出所：前掲第3表および拙稿「19世紀後半におけるポーランド王国繊維工業の発展」, 78, 87頁により作成.

Scheibler の企業がどのような地位を占めていたのかを、約10年ごとに見てみると第4表のようになる。Scheibler の企業はもっぱら綿製品の生産を行っていたから、そちらの方の割合を見ると、(表にはないが) 1888年の23.9%に至るまで急速に生産額のシェアを高めていることがわかる。ひとつの企業だけで綿工業の全生産額の4分の1近くを占めているのである。繊維工業全体で見ても12%以上の生産を担っている。しかしその年をピークとして1890年代以降その

シェアは次第に低下してゆく。果してそれは Scheibler の企業の衰退を物語っているのであろうか。

事実はそうではない。第5表の固定資本額の着実な増加が示しているように、Scheibler の投資意欲は20世紀に至っても衰えることはなかった。第6表の紡錘数を見ても、1870年代の後半までは間断なく生産規模の拡大が計られている。紡錘数の増加はその後停滞するが、代って織機の台数が段階的に引き上げられ、特に蒸気馬力数が飛躍的に増大させられた。つまり量的な拡大に代って、企業の質的な高度化＝近代化がなされているのである。それを裏付けるように、Scheibler の企業の機械と設備の評価額は、1880年の349万ルーブルから、85年383万6千ルーブル、90年415万1千ルーブル、95年494万3千ルーブル、1900年852万1千ルーブル、05年965万5千ルーブル、10年1,155万7千ルーブル、13年1,272万3千ルーブルへと着実に高まっているのである。¹⁾ 1890年代以降の

第5表 Scheibler の固定資本額
(千ルーブル)

年	固定資本	年	固定資本
1855	107.9	1873	1,822
1857	136.8	1875	2,956
1858	162.3	1878	4,500
1860	178.0	1880	6,072
1861	250.0	1885	7,599
1864	266.0	1890	9,554
1865	318.9	1895	11,026
1866	333.6	1900	16,318
1867	432.2	1905	17,711
1868	683.3	1910	20,047
1869	758.4	1913	21,706
1870	873.2		

出所：Puś, Pytlas, *op. cit.*, s. 41, 78. ただし1870年までは拙稿「成立期ポーランド王国繊維工業の企業家像」, 91頁から再録。

1) Puś, Pytlas, *op. cit.*, s. 78.

Scheibler と Grohman

第6表 Scheibler の機械設備

年	紡錘数	織機数	蒸気馬力	年	紡錘数	織機数	蒸気馬力
1855	5,740		40	1878	190,000	3,450	3,524
1858	18,000	30	100	1879	215,000	3,565	4,500
1859	18,000	100		1884	222,326	3,600	4,550
1866	26,000			1890	230,952	3,664	4,890
1867	28,444			1895	222,736	3,715	
1868		200		1899	246,336	4,789	9,480
1869	48,000	400	266	1900	241,525	4,789	9,932
1870	58,000	450		1905	230,187	4,826	
1873	118,000	2,200	2,000	1910	221,573	4,858	10,740
1877	136,000	2,200		1913	220,543	4,852	14,150

出所：Puš, Pytlas, *op. cit.*, s. 40, 82. ただし1870年までは第5表と同じく再録。

Scheibler の生産額のシェアの低下は、1企業としての量的拡大の限界を示すものであろう。企業の質的近代化はそれ以降も続くのである。ちなみに、その紡錘数は1877年にポーランド王国全体の35.3%¹⁾、1885年には44.0%を占め²⁾（当時 Scheibler の紡錘数はイギリス最大の紡績工場のそれよりも多かったと言われる³⁾）、それ以降も1900年24.3%⁴⁾、1908年18.4%⁵⁾と生産額のシェアよりもかなり高い水準を保っていた。また機械制綿織機数の王国内での割合も、1877年49.9%、1886年34.5%、1900年19.5%、1908年18.4%と次第に低下しつつも生産額に比べれば高い割合であったし、蒸気馬力数も王国繊維工業の中の1877年47.7%、1885年22.8%（ウッジ綿工業の中では45.1%）、1900年11.1%（綿工業に限れば19.5%⁶⁾）というシェアを占めていた。

Scheibler の投資の積極性あるいは先端性は、上記の他、織機や紡績機につ

1) *Ibid.*, s. 83.

2) *Ibid.*, s. 83.

3) *Ibid.*, s. 84.

4) *Ibid.*, s. 88.

5) *Ibid.*, s. 89.

6) 以上 *Ibid.*, s. 83, 84, 88, 89.

7) 以上 *Ibid.*, s. 83, 84, 88.

いてイギリスやドイツの最新鋭機を輸入したことや、1860年代の半ばにポーランド王国で初めて燃料として石炭を導入したり¹⁾、ウッジの企業としては初めてガス燈用の設備を自分の工場内に作ったり（1878年創設、1887年拡大²⁾）、あるいは自前の発電所を建設して（1911年）さかんに電力を利用したりした³⁾ことにも現われている。しかしさしもの企業も第1次大戦前夜には機械の更新が滞り気味となって技術革新も頭打ち状態となり⁴⁾、企業収益率（自己資本に対する純利益）は1881年11.3%、85年7.6%、90年5.9%、95年5.3%、1900年3.9%、05年2.5%、10年1.9%、13年1.4%と急速に悪化していった⁵⁾。そのことがやがて第1次大戦後、危機を乗り切るために Scheibler の企業と後述の Grohman の企業が合併する遠因となるのである。

ところで Scheibler の企業は1880年まで個人企業であったが、Karol の死の直前の1881年に株式会社に変更された。しかしその株式は大部分を本人と家族が所有したために、外部資本の新たな導入という効果はほとんどなく、もっぱら信用取引の容易さおよび海外の取引先と銀行からの信用の増大と、皮肉にも家族間の財産分割の迅速化という意味しかもたなかった。

次にウッジの企業家のもうひとつの例として、Grohman の企業に少しだけ触れておこう。

IV

ザクセン出身で1823年にポーランド王国に移住した Traugott Grohman のその後の経歴は、職人から上昇した繊維企業家のひとつの典型を示している。1833年にズギェシでの綿キャラコ・マニュファクチュア（弟 Karol との合資会社形態）によって企業活動を開始した Grohman は、1844年ウッジに紡錘数1,632

1) *Ibid.*, s. 45.

2) *Ibid.*, s. 77, 80—81.

3) *Ibid.*, s. 89—91.

4) *Ibid.*, s. 92—93.

5) *Ibid.*, s. 116.

Scheibler と Grohman

の綿紡績工場を設立することによって、綿工業の企業家として本格的な一歩を踏み出すことになった。¹⁾ その後の Grohman の企業の発展は第7表に示されている。生産の絶対額については先の Scheibler ほど大きいものではないが、1847年から1893年までに10倍、さらにいくつかの工場を合併して株式会社となった1899年以降は1900年に135倍、1913年には実に当初の276倍という著しい発展を示して、絶対額においても Scheibler の企業と肩を並べるほどになっている。

Grohman の企業の急成長の原因も Scheibler の企業と同じくやはり技術革新で、1854年の18馬力の蒸気機関の設置がそのきっかけとなった。²⁾ その後前述の「棉花飢饉」によって一時停滞するものの、1865年以降再び工場の近代化が進められ、1867年には紡錘数は3,000錘に増加している。³⁾ Traugott の死 (1872年)

第7表 Grohman の生産額 (ルーブル)

年	生産額	年	生産額
1847	31,240	1877	216,125
1849	46,000	1878	417,690
1851	46,500	1879	417,690
1852	43,200	1881	450,000
1853	43,200	1882	450,000
1854	70,050	1885	425,000
1859	81,655	1888	545,000
1860	91,980	1892	305,000
1867	87,500	1893	310,000
1869	110,400	1900	4,214,400
1871	110,000	1904	4,500,000
1875	110,000	1911	4,500,000
1876	110,000	1913	8,633,171

出所：Puś, Pytlaś, *op. cit.*, s. 29. 98. ただし1869年までは第5表と同じく再録。

1) 前掲拙稿「成立期ポーランド王国繊維工業の企業家像」, 87—88頁。

2) Puś, Pytlaś, *op. cit.*, s. 30.

3) *Ibid.*, s. 30.

後も企業は息子の Ludwik に受け継がれ、蒸気馬力数は1879年 100馬力¹⁾、1888年 250馬力²⁾、1904年 1,260馬力³⁾、1913年 2,070馬力⁴⁾と増え続けた。ここでも Scheibler の場合と同様イギリスやドイツから最新の紡績機や織機が導入され、工場において電力の使用が試みられた。そうした投資によって固定資本額は第8表のように増加している。

第8表 Grohman の固定資本

年	(千ルーブル)	年	(千ルーブル)
1850	21	1905	3,063
1869	60.5	1910	3,488
1886	450	1911	6,378
1900	2,497	1913	6,461
1901	2,677	1914	6,107

出所：Puś, Pytlas, *op. cit.*, s. 31, 94.

Traugott Grohman の経営の特色のひとつは、その資金繰りが極めて良好で、他の多くの企業家と異なってその経営活動中1度も「ポーランド銀行」からの借入金を利用せず、高い収益率に支えられながら自己資金による投資を繰り返したことである。そしてその高収益は、彼の製品選択に対する先見の明と経済計算の熟達を含む優れた経営能力がもたらしたものであった⁵⁾。Traugott の死後企業は1899年に至って株式会社となるが、その株式の所有状況は前述の Scheibler の場合とほぼ同じ事情であった⁶⁾。

V

ポーランド王国の工業化は、ウッジを中心とする目覚ましい繊維工業の発展と

1) *Ibid.*, s. 93.

2) *Ibid.*, s. 93.

3) *Ibid.*, s. 94.

4) *Ibid.*, s. 94.

5) 同上拙稿, 89頁.

6) Puś, Pytlas, *op. cit.*, s. 74—75.

Scheibler と Grohman

なってその成果を結実させた。確かにそれは先進国と比較すれば不十分で特殊なものでしかなかったかもしれぬが、ポーランド王国を取り巻いていた困難な諸条件を考える時、我々はその成果に驚嘆せざるを得ない。ではいったいどのような要因が、それを可能にしたのであろうか。

このような視点に立って以上の2人のウッジの企業家の簡単なスケッチを振り返る時、我々は彼らの企業家としての能力がポーランド王国の工業化に大きく貢献したであろうことを認めざるを得ない。Scheibler は、いわば国際的なスケールをもったエリート的な企業家として、そして Grohman は職人から叩き上げの企業家として、それぞれウッジの繊維工業の発展を担っていた。彼らはポーランド王国の置かれた歴史的環境の中で、極めて特殊な形で提供された資本、市場、労働力、技術といった諸要素を、各々のやり方で巧みに結びつけている。そこにはポーランド王国の工業化の特殊性を離れて、企業家としての一般的な能力の高さを発見できるのである。たとえその数は少なかったとしても、このような企業家の存在が、ポーランド王国の工業化の成果と深く関わっていることはまちがいあるまい。彼らがドイツ系の企業家であったという点は、初期のポーランド王国政府の工業育成策が外国人企業家の移入という方向に向けられていたことの結果であろう。彼らがロシア市場に大きく依存していたという事実は、おそらくそれがポーランド王国の工業化の客観的条件のひとつであったからに他あるまい。

問題となるのは、彼らがどの程度“ポーランドの”企業家でありえたのかという常に問われてきた点と、その資金調達方法に見られるような近代企業家としての限界がその後の客観的条件の変化にいかに対応し得たかという点であろう。その両者はそれぞれ別の問題なのであって、ポーランド王国の工業化の特殊性の新たな見直しとともに、今後取り組まれるべき課題である。